

# 平成30年度 学力向上指導改善プラン

三田市立小野小学校長 久後 幸喜 印

学校教育目標		心豊かにたくましく主体的に学び 人とつながる小野っ子の育成				
推進主体		管理職、学校教育改革推進委員会を中心とした学力向上委員会				
学力に関する前年度の課題・経年の課題						
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	国語	・少人数のため、授業でも話すことへの抵抗感は薄い、話し手の質問の意図を捉えながら聞き質問することに課題がある。 ・書くことへの苦手意識を持っている児童が多く、漢字の読み書きや順序良く文章を書くことに課題がある。			
		算数数学	・表やグラフ、図形から正確に情報を読み取り、比べたり、大きさを求めたりすることに課題がある。 ・文章題など、題意把握を苦手とする児童が多く、国語の学習とも関連付けて指導することが求められる。 ・計算力の向上については、家庭学習の充実と連動して、少しずつ成果が表れており、継続した取組が重要である。			
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	・学習直後は繰り返し練習問題等に取り組むことで一定の力をつけている。 ・時間が経過してからは定着率に課題が残る。	・すべての児童が学び合う喜びを感じる授業を進めると共に、テスト後の補充学習にも力を入れる。	・年度初めに学力の把握を全校的に行い、その結果を授業改善に活かす。 ・朝学習の時間に百マス計算や文づくりにとりむとともに、個別の補充学習を実施できるようにする。	・学力把握の結果を活かし、個人の状況に応じた課題設定をするとともに、特別支援の視点を持って指導する。 ・朝学習の取組を継続し、自身の伸びを認識させられるように支援する。	・「学習タイム(ぐんぐんタイム)」の計画的な実施により、ねらいを明確にして学力向上に取り組むことができた。 ・今後は、個別の学力差によりよく対応できるように、支援の確立や環境整備を図る必要がある。
	授業等からうかがえる状況(各教科)	・与えられた課題に粘り強く取り組む力がついてきた。 ・応用問題に対しては依然最初からあきらめてしまう傾向がある。	・すべての児童が主体的に学び、一人ひとりの能力が最大限に発揮される質の高い授業を進める。	・安心できる人間関係の中で落ち着いて学習するとともに、難しいことへの挑戦や解決できた充実感を味わうことで学習意欲を高めていく。	・授業規律を「学習名人10の約束」に整理し、児童に示すことで、より意識を高めていくことができた。 ・全国学力学習状況調査の理科の正答率はおおむね高く、意欲もある。自然環境や少人数を生かして、一人ひとりが十分に学習を進めている成果ととらえられる。 ・児童・保護者アンケートから自分の考えを表現する力の向上が課題として見られることから、言語活動のさらなる充実を図る。	・「学習名人10の約束」を学ぶ基本姿勢として位置づけるとともに、キーワードを抽出し児童により意識づけを図ることができた。今後は、日頃の意識づけを強化し、学習への姿勢を定着させていく。 ・後期児童・保護者アンケートからは、学習の理解度に対する児童の意識がさらに上昇し、保護者からの評価も高まってきた。一方、表現力についても肯定的評価が高まってきており、取組を継続していくことが重要である。
学力向上に慣れ等る学習習慣・生活	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況	・朝食、起床時刻、睡眠時間といった生活習慣については、一定の定着が図られてきている。 ・就寝時刻テレビやゲームに費やす時間に課題がある。インターネットやスマホの利用について、見直す必要がある。 ・学校に行くのは楽しい、友達に会うのは楽しいと思う割合は非常に高く、学校生活の満足度が高い。	・就寝時刻、ゲームなどの家庭での過ごし方も含めた生活の見直しを図り、より良い基本的な生活習慣の定着に努める。 ・家庭学習の手引き「がんばれ小野っ子」の有効活用を呼びかけ、家庭学習の充実と宿題以外の学習にも取り組んでいくよう家庭との連携を深めていく必要がある。 ・学校や家庭における積極的な読書活動を奨励し、そのための環境整備に努める。	・学校により、保健だより、学年通信、家庭訪問、個人懇談などでの発信また相互通信を通して理解と協力を求める。 ・家庭学習の手引き「がんばれ小野っ子」の有効活用を呼びかけ、家庭学習の習慣化と宿題以外の学習にも取り組んでいくよう家庭との連携を深めていく。 ・学級会などの話し合いや、協力しよう活動を通じて、考えを深めること、広げることができるよう継続して指導する。 ・朝学習に読書タイムを設定し、読むことの基礎となる力の向上、読書習慣の定着を図る。	・質問紙調査から、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う割合が高い状況にある。 ・前期児童・保護者アンケートから、各種通信や家庭訪問、個人懇談を通じた学校と家庭との連携について、おおむね高評価を得ることができた。 ・「がんばれ小野っ子」の活用は十分とは言えないが、児童・保護者とも小学校や家庭における学習理解の認識が高まっている。 ・就寝時刻やゲーム等の使用については、依然として課題が見受けられる。さらなる啓発と取組を進める。	・後期児童・保護者アンケートから、友だち関係の良好さについてかなり高い評価をいただいている。家庭学習の時間も確保されてきている。安定した学校生活と家庭生活が関係になっており、今後も好循環を生むよう取り組んでいく。 ・保護者の各種通信への関心は相当高く、情報発信により家庭生活についても啓発が可能である。「読書時間」や「家庭学習の手引き」の活用について、肯定的評価が少ないことから、さらに啓発する必要がある。 ・就寝時刻やゲーム等の使用については、依然として課題が見受けられる。さらなる啓発と取組を進める。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	・テレビの視聴時間やゲームをする時間が多く、生活習慣の見直しが課題である。 ・家庭での学習習慣が定着しつつあるが、自ら学ぶ姿勢を育てるために一層の取り組みが必要である。 ・朝の「読書タイム」の効果として、読書の楽しさを感じている子が多い。今後も児童の読書活動を高めるための環境整備が重要である。	・教材研究を深め、ねらいを明確にし、支援を工夫した授業を日々心かける。	・目標の達成に向け組織的、計画的に進める。	・授業公開、事例研修を定期的設定してきており、得られた知見をもとに具体的な手立てを見出してきている。 ・児童に算数アンケートを実施し、具体的な状況に照らして検証可能な研究を進めている。 ・今後も共通実践を積み上げるとともに、研究発表の場で広く研究の成果を示すようにする。	・算数科の研究会を開催し、年間を通じて計画的に研究を進めてきたことで、共通実践が図られ成果が表れている。 ・次年度にも同様の研究を進めよう計画をしている。 ・今後は、算数科の研究で焦点化されたガイド学習について、発達段階に応じた力のいれどころなどを明確にし、さらに定着を図っていく。
校内研究・研修の状況	校内研究の状況	・「主体的に学習に取り組み、自分の考えを表現できる子の育成～少人数の特性を生かした算数科の学習指導の充実～」をテーマとし、算数科に焦点をあてた研究をスタートした。 ・「めあて」と「ふりかえり」、学びを深める授業展開、ペア学習などの交流を支える場の設定など、授業実践を通して有効な手立てを見出し、共通実践をしていくことが重要である。	・組織として各評価及びアンケートの分析結果から次への取り組みを考察し、実行していくというサイクルを充実させていく必要がある。	・PDCAサイクルを全職員で共有し、学期ごとの取り組みを進める。	・学習指導要領の改訂にあわせて、必要な研修を取捨選択し実施している。 ・今後もケース会議や児童理解等、児童の状況に応じた研修を臨機応変に設定する。	・今日的な課題を想定し、年間を通じて計画的に研修を進めることができた。 ・今後は、小規模化・複式学級化する本校の課題解決につながるよう、研修のねらいを明確にして設定する。
	校内研修の状況	・保護者や地域の本校に対する支援・協力体制は大変心強い。 ・校区が大変広く、徒歩での通学している実情を勘案して安全面での取組が教育活動全般において必要であるとともに地域を巻き込んだ(PTA+地域見守り隊など)安全指導が必要である。	・家庭・地域への積極的な情報発信と連携をさらに進める。	・学校により、学年通信、その他の通信で情報を広く発信する。	・学校関係者評価委員会での議論を生かし、通学中の安全指導が周知されるなど、効果がでている。 ・運動会で地域種目を実施するなど地域との協働を進めており、今後も保護者・地域へ広く情報の発信を行っていく。	・年間を通じて、保護者・地域の方が学校教育に携わる機会が増し、連携した取組が成熟してきている。 ・今後は、三田市の「学校のあり方協議会」の方針等もふまえながら、学校と地域の協働体制をさらに構築していくことが必要である。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	・保護者や地域の本校に対する支援・協力体制は大変心強い。 ・校区が大変広く、徒歩での通学している実情を勘案して安全面での取組が教育活動全般において必要であるとともに地域を巻き込んだ(PTA+地域見守り隊など)安全指導が必要である。	・家庭・地域への積極的な情報発信と連携をさらに進める。	・学校により、学年通信、その他の通信で情報を広く発信する。	・学校関係者評価委員会での議論を生かし、通学中の安全指導が周知されるなど、効果がでている。 ・運動会で地域種目を実施するなど地域との協働を進めており、今後も保護者・地域へ広く情報の発信を行っていく。	・年間を通じて、保護者・地域の方が学校教育に携わる機会が増し、連携した取組が成熟してきている。 ・今後は、三田市の「学校のあり方協議会」の方針等もふまえながら、学校と地域の協働体制をさらに構築していくことが必要である。
	小・中における教科連携等の状況	・授業参観も含めた交流会、管理職や生徒指導担当者の交流はあるが、教科として身につけておきたい力(知・技)に視点をのいた連携という点では課題がある。	・これまでの四校交流会を大切にしながら、発達段階に応じ共通した学習規律の策定に向けた小中学校間の連携を深める。	・交流会、連絡会、担当者会等を活性化し、定期的な開催をめざす。	・相互の授業参観を元に情報交換し、各会の内容をより深め、活性化する。	・自然学校の合同実施等、学年に応じた校種間連携を進めている。 ・中学校区の全体研修の実施をきっかけに、さらに幼小中の成長の連続性を踏まえた情報交換や取組を推進する。